

20. 肉用牛の育林放牧現地実証

南部振興局 農山漁村振興部 企画・流通・畜産班

○衛藤央好、高木喜代文

【はじめに】

佐伯市宇目地区は、繁殖雌牛が佐伯全体の20%おり、市内でも畜産業の盛んな地域である。林業については、地域の9割以上が林地であり、県内でもトップクラスの人工林面積を誇る。

大分県においては、中山間地に適した取り組みのひとつとして「おおいた型放牧」の普及を行っているところである。一方、林業においてはシカを始めとした野生動物による被害が多発し、鳥獣害対策は急務となっている。また、育林地における下草刈りは多くの労力を必要とし、より省力的な林地管理の方法が求められている。

以上の点を踏まえ、効果的な方法として肉用牛の育林放牧が考えられる。これは主に、林業家にとってのシカ対策や育林地における下草刈りの省力化と、畜産農家にとっての肉用牛管理の省力化といった林・畜双方のメリットをねらったものである。

【方法】

育林放牧を行うにあたり、畜産農家1戸と林業家1戸から成る「宇目育林放牧研究会」を組織。林業家が放牧地の提供をし畜産農家が放牧する牛を提供する「林畜連携」の方法をとった。また、林業家及び畜産農家はともに放牧経験が無かったため、関係機関による総合的なバックアップを行った。森林組合や県などの関係機関協力のもと、放牧地周囲の草刈りや電気牧柵の設置などの準備を行った。

放牧期間は平成20年9月24日から同年12月1日（草不足による終牧）とした。日誌の記帳やデータ収集は研究会員が行った。終牧後の幼木への被害については森林組合を始めとした関係機関により調査を行った。

【結果】

(1) 放牧をしたことによって林地の「舌」草刈りができた。さらに、シカによる被害も放牧期間中はほとんど無く、牛による幼木への被害も2~3年生のもので5%（踏み倒し）、4年生のもので13%（体の擦りつけ）と一般的なシカによる被害と比べると深刻なものではなかった。

(2) 林業家、畜産農家共に放牧に対して省力化や低コスト化に一定の成果を感じており、以後も引き続き放牧を行いたいとのことであった。また、放牧していた牛2頭は妊娠牛であり、期間中は大きな事故もなく放牧後に2頭とも無事に出産した。

【今後の取り組み】

単年では一定の成果をみせた育林放牧であるが、翌年の平成21年度の放牧に向けた草勢調査において前年より多くのワラビが確認された。牛がワラビを摂食すると中毒症状を示す為危険であると判断、放牧を見送った。今後は、毒草の無い放牧地の選定などに留意した育林放牧の推進をする必要がある。